# 生に対する真剣さ
## ―キェルケゴールの魅力―

鈴木　祐丞

自分にとって謙虚であることほど難しいことはない。キェルケゴールを読んでいるので、このことに今再び気づく。自分が負けたと感じることほど私にとってつらいことはない。問題になっているのが、ただ真実をありのままに見ることに過ぎないのに、そうなのである。[*1]

## 序

なぜ私はキェルケゴールに惹かれるのか。

率直に言って、キェルケゴールの文章はひどく冗長的で話の筋道が分かりづらいし、思想の多くはあまりに直観的で論拠に乏しいし、特に日誌の内容は（日誌なので当然ではあるのだけれど）独りよがりである。それでも私は、ウィトゲンシュタインが別の文脈で用いている比喩を使えば、「灯りの周りを飛び回る昆虫のように」[*2] キェルケゴールの周りを飛び回っている。

少しずつ分かってきたのは、彼の文章や思想には上述のような致命的とも言えるような欠陥があるものの、それでも彼が、少なからぬ局面で、とても大切で本質的なことを言ってのけているということ、ここに私にとっての彼の魅力があるのだろうということである。たとえば、『死にいたる病』において、キェルケゴールは、罪の本質とは個々の罪業のうちにではなく個々の罪業を可能としている内面的状態のうちにこそあるのだ、と述べる。[*3] この洞

---

*1 ルートヴィッヒ・ウィトゲンシュタイン（鬼界彰夫訳・解説）『ウィトゲンシュタイン　哲学宗教日記』、イルゼ・ゾマヴィラ編、講談社、2005 年、p. 123

*2 ibid. p. 118

*3 *SKS* 11, 217 /『死にいたる病』（桝田啓三郎訳、ちくま学芸文庫、1996 年（初出は 1963 年）p. 194

察にはやはり一つの真理があるように思う。そして、このような私にとっての彼の魅力について、さらにその根源を探ってみると、結局のところ、私にとっての彼の魅力は、生というものに対する彼のこの上ない真剣さのうちにこそ根を有しているのではないかということに気づく。つまり、キェルケゴールは、自らの生に対して「極端」と形容しうるほどにまで真剣に向き合ったのであり、そうであったからこそ、彼は、さまざまな本質的な洞察を得、それらを著作や日誌に散りばめることができたのだ、ということである。ふたたび上述の『死にいたる病』の例で考えてみれば、罪の本質は、個々の具体的な罪業にではなく、一貫的な内面的状態のうちにこそ存するというキェルケゴールの洞察は、彼自身の生を背景にして得られたものにちがいないし、そしてそのような洞察は自分の罪について本当に真剣に向き合う者だけが手にすることができるはずのものであろう。要するに、私は、時折不満を抱きつつも、手間暇をかけて、キェルケゴールの生に対する真剣さの果実のいくらかを味わっているのだろうと思う。

キェルケゴールの魅力の一つと思われる彼の生に対するこの上ない真剣さに全身全霊をもって共感し、その果実たる彼の思想を心の底から味わうことができる人々がいる。おそらくたくさんいる。それは、真剣に信仰に向き合っている人々であり、さらに言えば、真剣に生に向き合っている人々である。私は以下で、ウィトゲンシュタインという哲学者をその一例として取りあげてみたい。自分が関わるあらゆることに対してやはり極端なまでに真剣に向き合ったウィトゲンシュタインが、信仰という局面においてキェルケゴールと共鳴し合ったこと、そしてその模様を眺めてみたい。ウィトゲンシュタインという人物の目を通じてキェルケゴールを見つめてみることで、生に対する真剣さというキェルケゴールの魅力を、鮮明に描き出してみたいのである。

## 天才ウィトゲンシュタイン

ウィトゲンシュタインの哲学上の師にあたるラッセルの鑑識によれば、ウィトゲンシュタインは、「…恐らく伝統的に考えられている、情熱的で、深遠で、熱烈で、卓越した天才として、私がこれまで知った天才のなかでおそらくもっ

とも完全な天才の実例」*4 であった。マルコムによるウィトゲンシュタインの評伝を読めば、ウィトゲンシュタインという人物のおおよそのイメージを形作ることができ、ラッセルの言うウィトゲンシュタインの天才性について理解することができるようになると思われる。例えば、ウィトゲンシュタインのケンブリッジでの哲学の講義の様子についての描写がある。ウィトゲンシュタインは、講義の参加者を前に、まるで一人きりで研究をしているかのようにして思索にのめりこむ。考えが行き詰まると、「『僕は馬鹿だ！』『おそろしくダメな教師だよ、僕は』『今日は頭の調子がまったくおかしい』といった風な言葉をつぶやいた」*5 という。また、時に彼は「極度に緊張し興奮し…目は一点をじっと凝視し、顔は生気にあふれ、両手は何かをつかみとるようなしぐさをつづける」ことがあった。「その表情は真剣そのものだった。あふれるばかりの真剣さと、精神集中の中で、最高の知性がちからをいっぱいにふりしぼっているのを、目の前に見る思いで、誰もがウィトゲンシュタインを見つめるのだった」*6。ラッセルの言うウィトゲンシュタインの天才性とは、おそらく、一つには当然彼の知的能力の卓越性のことではあるのだが、ただそれだけではなく、彼がその知的能力をこのうえない真剣さをもって用いることができたということなのだろう。ふたたびマルコムの言葉を借りれば、彼が、「いい加減な妥協のできない人、いつも完全に理解できなければ気のすまない人だった」点に、「火のようにはげしく真理をさがし求め、全知能をふりしぼって戦い続ける人」*7 だった点にこそ、彼の天才性の本質があったように思われるわけである。古今東西、ウィトゲンシュタイン並みの高度な知的能力を有する人間は、稀であるとはいえ、それなりにはいた（いる）のだろうと思う。けれども、「純粋なまた冷酷なまでにきびしい誠実さ」*8 を兼ね備えた人は極めて例外的であると思われ、この真剣さこそが彼の「天才」たるゆえんなのであろう。

---

*4 レイ・モンク（岡田雅勝訳）『ウィトゲンシュタイン―天才の責務』、みすず書房、1994 年、p. 47

*5 ノーマン・マルコム（板坂元訳）『ウィトゲンシュタイン　天才哲学者の思い出』、平凡社、1998 年、p. 15

*6 ibid. p. 16

*7 ibid.

*8 ibid. p. 17

## ウィトゲンシュタインが罪と向き合う

哲学的思索にその天才性をぞんぶんに注ぎ込んできたウィトゲンシュタインが、あるとき、それを自分の生き方についての思索へと注ぎ込み始めるようになる。自分自身のこれまでの生き方について悔悟し、それとともに、あるべき生き方について思いを凝らすようになるのである。それは、おもに1936年から1937年にかけてのことであり、その際のウィトゲンシュタインの思索が刻み込まれているのが、比較的近年その存在が研究者に知られるようになった『哲学宗教日記』*9 である。思想史的な観点で興味深いのは、この時期が彼の哲学上の転換点（前期主著『論理哲学論考』から後期主著『哲学探究』への思想的変遷において重要な時期）にあたること、つまり、自分の生き方をめぐる彼の思索が、彼の哲学に（どのように）影響を及ぼしたのかという点とである*10 が、ここでは焦点を彼の生き方についての思索の方に合わることにしたい*11。

ウィトゲンシュタインは、カトリックとしての幼児洗礼を受けている。けれども、「…我々は教会に属しているという安らぎなしに生きねばない」*12 という彼の言葉から窺い知られるように、彼は、キリスト教の教えのすべてを無条件に受け入れていたわけではない。例えば神による創造について、あるいは不死という考えについてなど、キリスト教の教えの一つ一つについて、自分自身

---

*9 ウィトゲンシュタインの遺稿カタログの中で「MS183」という ID を与えられた、ドイツ語で記された彼の日記である。1993 年にはじめて研究者の手に渡り、まず翌年に原語であるドイツ語で出版された（Ludwig Wittgenstein, *Ludwig Wittgenstein: Denkbewegungen. Tagebücher 1930-1932, 1936-1937,* Hrsg. von Ilse Somavilla, Innsbruck: Haymon Verlag, 1997）。2003 年には英訳（Ludwig Wittgenstein, *Ludwig Wittgenstein: Public and Private Occasions*, ed. by James C. Klagge and Alfred Nordmann, Maryland: Rowman & Littlefield 2003）が、ついで 2005 年に邦訳（ルートヴィッヒ・ウィトゲンシュタイン（鬼界彰夫訳・解説）『ウィトゲンシュタイン　哲学宗教日記』、イルゼ・ゾマヴィラ編、講談社、2005 年）が刊行された。

*10 鬼界彰夫「今こそ読むべきウィトゲンシュタイン」、『ウィトゲンシュタイン』、河出書房新社、2011 年、pp. 2-20 参照。

*11 以下の内容について、詳細は拙稿（Yusuke Suzuki, 'Wittgenstein's Relations to Kierkegaard Reconsidered: Wittgenstein's Diaries 1930-1932, 1936-1937,' *Kierkegaard Studies Yearbook 2011,* Walter de Gruyter, 2011, pp. 466-476）参照。

*12 ノーマン・マルコム（黒崎宏訳）『ウィトゲンシュタインと宗教』、法政大学出版局、1998 年、p. 34

の生の現場に取り込んでよく考え、そして本当に信ずべきであることだけを信ずるという仕方で、自分なりの信仰を形作っていったのである。*13 1936年から1937年の時期の、生き方についての彼の思索は、この文脈の中に位置づけられるべきものであって、彼は、その時期に、キリスト教の教えの中核たる罪の赦しをめぐって思索を繰り広げるのである。この私にとって、キリストによる罪の赦しとはいったい何であるのか、それを信ずるとはいったいどのようなことなのか。こうしたことを、ウィトゲンシュタインは、比類なき真剣さをもって考え続けるのである。

ウィトゲンシュタインは、まず、これまでに自分が犯してきた罪を気にするようになる。ウィトゲンシュタインにとっての最大の罪とは、モンクの評伝によれば、彼が、小学校教師をしていたときに生徒の一人に平手打ちをしてけがを負わせたこと、そして法廷でその事実を否認したことであった*14。ウィトゲンシュタインは、これに代表されるような自分のこれまでの罪の負債のすべてを、なんとか清算してゼロにしようと奮闘する。彼は、手紙を通じて、またときには直接出向いて、これまでに自分が犯してきたさまざまな罪を、関係する人々に告白し、謝罪し、その許しを得ようと努めている。告白と謝罪を受けた彼の知人の一人であるファニア・パスカルのいくぶんシニカルな回想が、彼の告白と謝罪の模様を臨場感をもって伝えてくれる（ちなみに、ウィトゲンシュタインがパスカルに告白した罪とは、彼が、実際には四分の三ユダヤ人であったにもかかわらず、四分の一だけそうであるように、周りの人々に思わせていたことである*15）。

> ウィトゲンシュタインは、都合の悪いときに電話をかけてきて、会いに行ってもいいかと尋ねた。彼女［パスカル］が緊急を要することかと尋ねると、彼は断固として、そうだ、待つことはできないと言った。「もし待つことができるものがあれば」、と彼女はテーブルを挟んで彼と向かい合い考えた。

---

* 13 ibid. pp. 9-39 参照。
* 14 レイ・モンク（岡田雅勝訳）ibid. p. 419
* 15 ibid. p. 418

「この種の告白、こんな形でなされる告白こそがそれだったのでした。」…話の途中で彼女は大きな声をあげた。「それがどうしたの。あなたは完全であることを望んでいるの」「もちろん！　私は完全であることを望んでいます」、と彼は怒鳴った。[*16]

罪の告白と謝罪をすることで、ひょっとすると、それまでに犯した罪の負債は帳消しになるのかもしれない。けれども、罪の本質は、先に触れた『死にいたる病』におけるキェルケゴールの考えが示すとおり、具体的な罪業を可能としてしまう持続的な内面的状態のうちにこそあるはずである。おそらくウィトゲンシュタインはこのことを身をもって学びとった。彼は、次第に、これから先自分はどう生きるべきかについて思い悩むようになるのである。つまり、ウィトゲンシュタインは、自分の本質的な罪深さは、具体的な罪業の負債を帳消しにしたところで変わることなく存在しつづけることを痛感し、そして、「純粋なまた冷酷なまでにきびしい誠実さ」から、つまりは生に対するこの上ない真剣さから、消し去ることのできない自分の罪深さと何らかのかたちで折り合いをつけて生きてゆこうと、もがき続けるのである。

こうして、ウィトゲンシュタインにとって、問題は、キリスト教の中核へ、すなわち罪の赦しへと収斂してゆくのである。キリストはたしかに人間の罪を赦す。キリスト教はそう教えている。では、この私にとって、キリストの罪の赦しとはいったい何なのであろうか。この私は罪の赦しに与ることができるのか。それができるとはいったい何を意味するのか。ウィトゲンシュタインは、こうした問いについて、思いを凝らしてゆく。彼にあっては、この問いは、次第に、すべて（天職と思われた哲学の仕事など）を捨ててキリストのあとの従うという「英雄的信仰」を追い求めるべきか、あるいは、赦しの恩寵のもとに自分の哲学の仕事を楽しく行うことができるのか、自分はこのどちらの生き方をこれから生きるべきなのかという問題へと、先鋭化してゆくのである。

[*16] ibid. p. 417

## ウィトゲンシュタインのキェルケゴール体験

ここでキェルケゴールが話に登場することになる。ウィトゲンシュタインは、自分の罪について、そして罪の赦しについて思い悩むこの時期（1936年から1937年）に、キェルケゴールの思想に、おそらく彼の人生を通じてもっとも真剣に、向き合っている。ウィトゲンシュタインは、この時期、キェルケゴールの『キリスト教の修練』を読み、キェルケゴールが同書で描き出す「キリストとの同時性」としての信仰を体現する「理想的キリスト者」のイメージを得たものと考えられる。つまり、ウィトゲンシュタインが思い描いた上述の「英雄的信仰」者のイメージの源泉は、キェルケゴールが『キリスト教の修練』で描き出す「理想的キリスト者」のイメージであるものと考えられるのである。そして、ウィトゲンシュタインは、そのイメージを、自分自身の現実の姿と重ね合わせてみて、自分がいかに理想的なキリスト者のあり方から隔たっているかを、つまりは自分のいかんともしがたい罪深さを、認識するに至るのである。ウィトゲンシュタインは、こうした自分の底なしの罪深さの認識を媒介として、キリストによる罪の赦しが、現にこの自分にも及んでいるのだということを見出すにいたるのである。そして、最終的に、彼は、今後は、罪の赦しという恩寵を身に受けつつ哲学という仕事を享受するという形での信仰を、その意味で「あるがままの信仰」を、生きることができるのだということを確信するに至るのである。

事の全体をキェルケゴールの側から眺めてまとめ直してみればこういうことである。つまり、キェルケゴールが『キリスト教の修練』において描き出す理念性が、ウィトゲンシュタインをして、自分という人間の不完全性についての、いかんともしがたい罪深さについての自覚へと至らせたのであり、最終的に、彼に、罪の赦しの恩寵をもたらしたのである。キェルケゴールの後期宗教哲学の主要概念を用いれば、キェルケゴールは、ウィトゲンシュタインを、「認容のキリスト教」の信仰へと導いたということである。

1936年から1937年にかけての、生き方をめぐってのウィトゲンシュタインの思索は、こうして幕を閉じる。ついでながら触れておくと、ウィトゲンシュタインは、1937年以降、キリスト教の信仰のために哲学を犠牲にするようなこと

はせず、むしろ、恩寵を感じつつ哲学という仕事に終生励み続けた[*17]。これはつまり、彼が、後期キェルケゴールの宗教哲学（「認容のキリスト教」）を生き続けたということを意味するのではないか。ウィトゲンシュタインは、1937年以降、次第にキェルケゴールとは距離を置くようになってゆくのではあるが、それでも、結局のところキェルケゴールの意図した仕方で、キリスト教の信仰を生き続けたのだと言えるのではなかろうか。

## キェルケゴールの魅力　― 生に対する真剣さ ―

私にとってのキェルケゴールの魅力―生に対する真剣さ―が、鮮明に浮かび上がってくるだろうと考えて、ウィトゲンシュタインという人物の目を通じてキェルケゴールを眺めてみた。

本稿冒頭の引用を繰り返すが、ウィトゲンシュタインは、1937年の日記に次のように認めている。

> 自分にとって謙虚であることほど難しいことはない。キェルケゴールを読んでいるので、このことに今再び気づく。自分が負けたと感じることほど私にとってつらいことはない。問題になっているのが、ただ真実をありのままに見ることに過ぎないのに、そうなのである。[*18]

「真実をありのままに見ること」とは、罪の自覚のことである。「純粋なまた冷酷なまでにきびしい誠実さ」をもったウィトゲンシュタインが「負けた」と感じるほど、それほどまでに真剣に、キェルケゴールは、自分自身の罪という現実に向き合い、罪についての本質をえぐり出したということである。実際、『あれか、これか』に始まり『瞬間』へと収斂するキェルケゴールの著作家としての活動の全体を、罪の赦しの信仰を求めての彼の内面的なドラマの反映と捉えることもできるだろう。キェルケゴールが、自分の生の全体を賭けて、生きる

---

[*17] ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン（丘沢静也訳）『反哲学的断章』青土社、1999 年、pp. 162-163

[*18] ルートヴィッヒ・ウィトゲンシュタイン（鬼界彰夫訳・解説）ibid. p. 123

こととという人間にとっての最大の課題に、彼にとっては罪と信仰の問題に、向き合ったがゆえに、彼といくばくかでも親和性のある精神は、彼に共鳴することができるわけである。その意味でウィトゲンシュタインはキェルケゴールの最高の理解者の一人であったのだろう。

最後に、やはりウィトゲンシュタインの『哲学宗教日記』から、彼によるキェルケゴール評を引用し、論を閉じることにしたい。

> 他のことについては多くの優れた意見を持っているシュペングラーが、キェルケゴールの評価については大きく誤っているというのは興味深いことである。ここには彼にとって偉大すぎる人間が、あまりにも近くに立っているのだ。彼はただ「巨人の長靴」を見ているに過ぎない。*19

*19 ibid. p. 142